

- 漫筆漫歩
- 学外からの眼

t・f

「異文化」は教えられるか

塩尻和子

人文社会科学研究科教授

レポートの衝撃

ギリシア思想の中に「徳は教えられるか」、あるいは「哲学は教えられるか」という命題があったと記憶しているが、異文化理解をテーマとしている私にとって、最近、「異文化は教えられるか」と自問自答しなければならぬ事態がおこった。

昨年度の「比較思想基礎論 B」（比較文化学類）のレポートを採点していたとき、一人の学生のレポートを読んで、まさに目が点になった。そこには「先生はプチ原理主義者だ」と書かれていた。続いて私が授業中に話した内容についての厳しい批判と、授業回数の少なさについての非難とがみられた。私は、学生が教師の見解に批判的なレポートを書いたからといって低い点数をつけたり不可にしたりはしない。勇気のある告発レポートだと解釈して A をつけた。

「プチ（イスラーム）原理主義者」というのは、私が授業の合間に、ある若手のイス

ラーム研究者の見解を取り上げて批判したことを踏まえている。その研究者は最近、マスコミなどで名声を得てきており、ある意味では英雄視されているので、名前を挙げなくても「ああ、あの人か」とお分かりになる向きも多いと思う。彼は「イスラームの聖典クルアーンには、もともと暴力や戦争を容認する教えが含まれているのでテロや戦争がなくならないが、キリスト教の聖書は平和主義なので、キリスト教では暴力は少ない」といった論調を掲げている。

この主張は、2001年の9・11同時多発テロ、現今のイラク戦争や、イラク内部の内戦状態、はたまた最近のムハンマドの風刺画事件などを考えれば、まさに「しかり」と納得がいく議論である。彼の主張は「わかりやすい」として、インターネットの中だけでなく、大新聞のコラムから日本政府の中央にまで浸透して、政府の中東外交の基軸をも支配する勢いとなっている。

しかし、彼の考えは一見もっともにみえるが、宗教学や聖典研究の立場からみればきちんとした学問的な裏づけがあるとはいえない。キリスト教にもイスラームにもユダヤ教にも、隣人愛を教える平和的で理想的な部分と、その裏にひそかに息づく暴力的な教示とが同居しているからである。人間という動物は愛情への執着も暴力への志向も、ともに備えた存在であり、信奉する宗教的理想が高ければ高いほど、逆に暴力的になってしまうことは、人類史を紐解けばすぐにわかることである。したがって、歴史を生き延びてきた伝統宗教について、どれが平和的でどれが暴力的であると、短絡に決めつけることは、少なくとも中立的でもアカデミックな姿勢でもない。

しかし、^{くだん}件の学生によれば、私のこのような批判は説明不足であり、しかも一方的なものであったというのである。

ムハンマド風刺画事件

この際なので、世界中で大騒ぎになった「ムハンマドの風刺画」を巡る事件についても一言、述べておきたい。

イスラームはユダヤ教、キリスト教とならぶ同じ伝統上にある一神教であり、同じ「神」を崇拝する兄弟宗教である。アッラーの神という表現があるが、アッラーとはアラビア語で the God を意味し、単に「神」と

言っているにすぎない。アッラーという名前の神を信仰しているのでは、ない。

この3宗教は当初から偶像崇拝を否定してきたが、キリスト教ではイエスを教義上、神の子として認めたために、さまざまなかたちの偶像崇拝が入り込んできた。しかしユダヤ教とイスラームとは、現在までかたくなに偶像崇拝を拒否し続けている。

イスラームではこの流れのなかで、創始者である預言者ムハンマド (Muhammad) を人間としては最高の存在として尊敬はするものの、彼の肖像を描いたり刻んだりすることは禁止してきた。もっともシーア派では、歴代のイマーム (初代はムハンマドの従弟で娘婿のアリー) の肖像画が掲げられているが、それでも神の像はもちろんのこと、ムハンマドを描くこともほとんどない。何らかのかたちで描かれる必要がある場合も、顔を白く塗りつぶしたり全身を炎で包んだりして、偶像表現にならない配慮をしてきた。

デンマークの新聞を皮切りにはじまった今回の風刺画事件は、このようなイスラームの教義やムスリム (イスラーム教徒) の心情を理解しないまま、風刺画にして嘲笑したものである。しかも、中にはテロリスト風に描いたものもあり、ムスリムにとっては「預言者の冒瀆」と受け取られても止むを得ない、お粗末なものである。

この程度のできの悪い風刺画ごときでデモやデンマーク製品の不買運動などと大きく騒ぎたてるのは大人気ないと、私などは思っていた。しかし、解決の道が見えてこないイラク戦争やテロ事件、イスラーム国家内部の政治腐敗や独裁といった政治・社会問題などに苦しむムスリムの人々にとっては、これがある意味で日ごろの鬱憤のはけ口になったことも否めない。とくに2月17日におこったリビアのベンガジ一帯での抗議行動は反政府的な色合いも帯びていたために、治安警察との衝突によって13人も命を落とす事態となってしまった。

報道や表現の自由とは、何をしても何を言ってもよいということでは、ない。事実ではないことに基づいて、他人を誹謗中傷することは名誉毀損罪にあたるように、世界中で15億人もの人々が信仰している宗教の創始者を面白がって冒瀆することは許されることでもなく、一般市民からの共感が得られることでも、ないであろう。

異文化は教えられるか

グローバル化が進展した今の時代、世界中、どこでも多くの異なった文化をもつ人々と出会い、ともに学びともに働くことが日常的に当たり前になってきた。このような世界の中で、いわば「離れ小島」のような日本列島に住む私たちにも、真剣な異

文化理解が緊急の課題として要請されるようになってきたが、このことは決してやさしいことではない。まだ人が知らない珍しいものや新奇なものを求めて異文化を学ぶことは、異文化理解の最初の第一歩にしかすぎない。エドワード・サイードによれば、これこそがオリエンタリズムであり偏見であるということになるかもしれない。

他者の他者性を見極めつつ他者の文化・宗教、思想を理解することは、じつは非常に困難な作業なのである。イスラームについても、何らかのフィルターを通すのではなく誤解や偏見を排して自らの文化を学ぶときとおなじく真摯に敬意をもって、ひとつひとつ丁寧に学ぶことが重要なのである。

しかし、今回の学生の正直なレポートによって、私は現実にはこの作業が極めて困難であることを胸の痛む思いで知らされた。

しかも、この思いはもうひとつの経験によって、さらに強固になった。

昨年12月中旬、木村武史先生が代表をなさっている日本学術振興会プロジェクト「千年持続学の確立」の活動の一環として、エジプトでカイロ大学、アインシャムス大学（比較文化学類との協定校）、筑波大学との合同会議に参加してきた。そこでは「心性の千年持続」を確立するという壮大なテーマで多くの興味深い議論が真剣に討議された。この点については、非常に意義の

ある会議となったが、ここでひとつ、気がついたことがある。

現在、南部エジプトで一人暮らしをしなから土地の民間信仰の調査を続けている岩崎真紀氏（筑波大学大学院生）がイスラームの聖者崇拝の現状を報告した際、エジプト側の学者たちが全員、「これはイスラームではない、私たちはそんな現象を知らない」と反論したことである。

それは、エジプトの大学教員という、いわば公的な立場の人たちが「表向きのイスラーム」と「民間レベルのイスラーム」とに関して、どのような立場を取っているのかが驚くほど明らかになった瞬間でもある。それまで会議で多宗教の共存や対話を推進する観点から順調に討議が進んでいた場で、突然起こった「対話拒否」の姿勢である。

岩崎氏のテーマが仏教やキリスト教の民間信仰であれば、彼らにとって何も問題がなかったのかもしれない。異文化理解の困難な問題は、実は「自文化」の中にもあることを、しみじみ教えられたことである。

授業時間への批判

さて、件のレポートの話にもどろう。異文化としてのイスラームを誤解や偏見を排してよりよく理解することが、地域紛争やテロを起こす要因を減少させ、この地球上に平和的な共存と対話を実現させるための

有効な手段だと私は信じて働いてきた。しかし、このような私の立場は、この学生には、まずもってイスラームを擁護する「ブチ原理主義者」と映ったようである。

これに授業時間数の少なさも追い討ちをかけてきた。この学生は実に細かく休講の日時を記録していて、私の授業は「年間で11回も休講になった」と批判した。昨年度、私が個人的な理由で休講にしたことは学類の授業では1度しかない。その他は、海外出張、会議、学類と大学院の入試、論文審査会など、止むを得ない理由であった。3学期には3回分の補講を行なったが、この学生は知らなかったのか出席していない。

本学ではとくに3学期は実際に授業回数^①が少なくなる傾向にあるが、2・3学期の授業である「比較思想基礎論B」は入試関連の休講の影響をまともに受ける。そのために、十分な授業が行なえなかったということについては、申し開きの余地はない。3学期の授業時間数に関しては、2学期制度と関連して、改めて教員会議で議論していただきたいと願っている。

彼は「私用であれ職務であれ、授業が休講になるのは学生にとっては同じこと」と反論するが、そのとおりかもしれない。

これも異文化理解の課題なのかしら？
(しおじり かずこ／宗教学・比較思想学)